

残率7.7%)と大巾に減少した。後期幼生飼育は受精後63日目までおこない、生残した810~900 μm の稚貝は9,800個体であった。D型浮游仔貝からの生残率は4.0%であり、後期幼生飼育開始時からの率は51.6%であった。

9月27日から屋外流水水槽で中間育成をおこなったが、大量斃死が起こり受精後91日目(中間育成開始28日目)の10月25日の生残数は216個体と激減した。D型浮游仔貝からの生残率は0.009%であり、中間育成開始(受精後63日目)からの率は2.2%であった。生残した稚貝の大きさは、大小のグループに分けられ大きい方は2,350~2,600 μm 、小さい方は1,000~1,725 μm であった。

大量斃死の原因は不明である。

1982年(昭和57年)の幼生飼育では、後期幼生飼育と中間育成時に大巾減耗期が観察されている。

6. 底質の粒度組成および底生生物調査(杉山)

今年度は図6に示すとおり水路部5地点で調査した。

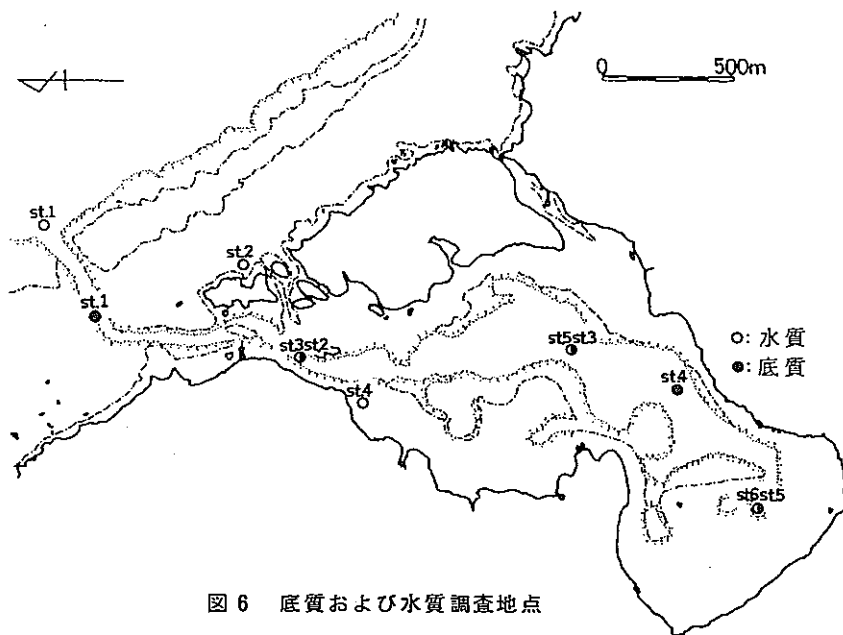


図6 底質および水質調査地点

(1) 粒度組成

1984年8月16日に湾内水路部5地点で採泥し、底質の粒度組成を調べた。採泥にはエクマン・バージ型採泥器を用い、その後の処理方法は前年度(沖水試、1983)と同様である。測定に供した標本はst.1が350.1, st.2が415.8, st.3が323.8, st.4が375.2, およびst.5が353.8gである。

結果は表8と図7に示すとおりでst.1と2においては中粒砂(250~500 μm)粗粒砂(500~1,000 μm)、および極粗粒砂(1,000~2,000 μm <)の比率がそれぞれ約78%と

96%あり、st. 3と4では細粒砂(63~125 μm)以下がそれぞれ約95%と92%、st. 5は中粒砂以上が約84%の比率であった。また塩酸処理後の残留率は湾口部が低く、湾奥部へ行くにしたがって高くなる傾向がみられ、st. 5付近の底質はほとんど陸上由来と考えられる。

表8 川平湾底質の粒度組成

Station No.	Size (μm)							HCl処理後残留率(%)
	>2000	1,000	500	250	125	63	63>	
1	6.7	24.1 30.8	27.5 58.3	20.1 78.3	10.7 89.1	1.9 91.0	9.0 100.0	0.6
2	23.1	33.6 56.7	30.6 87.3	8.3 95.6	0.7 96.3	0.1 96.4	3.6 100.0	2.9
3	—	0.06	0.4 0.5	1.2 1.7	3.0 4.7	21.8 26.5	73.5 100.0	17.5
4	0.2	0.1 0.4	0.9 1.3	2.2 3.4	4.6 8.0	11.5 19.5	80.5 100.0	34.2
5	10.7	26.3 37.0	24.6 61.6	22.8 84.4	5.5 89.9	2.2 92.1	7.9 100.0	93.7

上段：重量比(%)，下段：積算重量比(%)

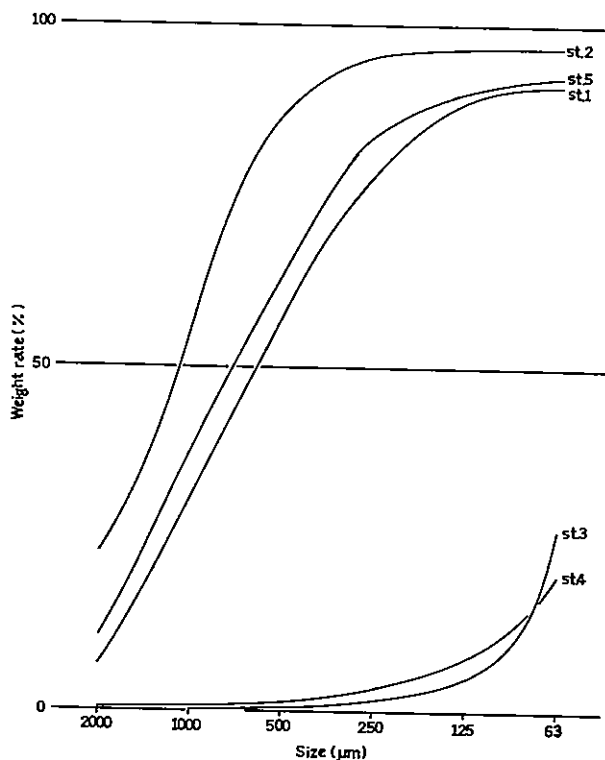


図7 川平湾底質の粒度組成